

の全景を人々の前に顯わしたのである。それが菩薩思想となり、授記物語となり然燈仏説話を成立せしめ、更に深められてやがて『無量寿経』において五十三仏が説られ法藏菩薩精神の顯現となり、遂に一切の苦惱する群萌が真実に救済される道が開顯されたのである。

以上「行」という実践的な仏道の歩みを手がかりとしながら、それが次第に宗教心の歩みに深められ、ついにアーリアン民族の伝承して来たった深い宗教的精神の歴史に深められ、法藏菩薩精神に目覚ましめられていったことを、簡単ながらのべて見たのである。「浄土教の興起と展開」とは、仏道精神を深くその根源へ逆のぼって、奥へ奥へと向って人類の宗教的精神の蔵の扉を内へと開き、深く自己の根源を明らかにすることと軌を一にするものである。

## 本願の自証

井上恵樹

本願が本願であることを自証するものは『大経』である。しかし『大経』が本願自証の契機として求めたものは『観経』であろう。「方便真实之教」「観経」は機と法との深き交流を物語たる。そこには韋提の如く、「実業の凡夫」であるが故にこそ「權化仁」と菩薩である不可思議が示される。その事は、『観経』が実業の凡愚の上に本願の真实を自証せる場である事を示そう。こ

の意味で『観経』の意義を問うてゆく。

『観経』「序分」には宿業の衆生韋提の苦惱流転と浄土請求が展開せられる。それは宿業を背負って歩み行かねばならぬ凡愚の在り様、歩み行き、というものを表わしている。衆生行が「行業」「業行」といわれるのはそれであろう。「教我觀於清浄業処」とは、宿業の彼方に自身存在の意義を発見せんとする宿業存在の限りなき真摯な歩み行きなのであり、そこに「観無量寿」して阿弥陀に問いゆく。

而してこの衆生の歩み行き、在り様に呼応して思われるは「阿弥陀仏者即是其行」「立最即行」なる、仏がそのまま行である如き、如来の歩み行き、在り様である。如来如去たる如来の歩み行きは善導の三縁釈に示される如く、衆生の歩み行きに一つに感応する。ではその如来の歩み行きの内実はどうであろうか。韋提の別語に対して突然光台現国は説かれ、韋提は不可思議にも阿弥陀仏国を別選する。光台現国の韋提別選は選び待ちて一代教が説き出される如き選びであり、本源の選びである。だから諸仏の国の根底にその根源としての弥陀浄土を発見する選び、「阿弥陀本国」の選びである。そこには諸仏国土の根源力となり、諸仏をして自からの浄土・阿弥陀仏国を称揚せしめ、衆生をして別選せしめる法藏本願力としての如来の在り様がある。善導の『大経』科文顯出が示す如く、『大経』の真实智慧海が衆生海の真底に從如来生する如き、如来の在り様が光台現国である。韋提の「教我思惟教我正受」の間は如来自らが如来である事の内実を問うものである。如来の住する報土は即「願土」であって、報土は報土の内

奥に限りなく従果向因し自証を求むる。如来はまず根源力として在り、それ故にこそ従果向因の自証の道を問い開くのである。光台現国の仏本源力は「教我思惟正受」という衆生の間に影現して、もって衆生海の真奥に如来の内的歩みを示して自証せんとするのである。「広開淨土之門」とはその了解である。

而して光台現国の法蔵根源力が「教我思惟正受」と自らの内実を問った時、その仏自からの答応こそ定善二善法、特に定善法なのである。定善は方便の教と性格づけられてはいるが最初から方便なのではない。「以観ニ仏身ニ故亦見ニ仏心ニ、仏心者大慈大悲」等の教言は明らかに方便観法を超えた世界が示現せられるのである、そこには本願成就の清淨功德が物語られている。善導が定善作法の並びゆきを破りて処々に讃嘆せられ「无漏を体となす」と本願土に信順せられた如く、定善法はまず本願酬報の阿弥陀を広説する。定善法を場として如来真実は衆生海のただ中に顕現する。

しかるにこれは如来の内実を仏自から自問するに应ぜるものであるところに、如来の具体的歩み行きの一步である。その限り、この如来真実顯現は、機の真底に沈潜し衆生を胎内深く同体攝取せんが為に、因願の世界に限りなく帰求しゆく。衆生の真底を求めての「假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔」といわれる法蔵永劫修行こそそれである。「和顏愛語先意承問勇猛精進志願無倦専求請白之法以惠利群生」たる法蔵永劫修行、それこそ如来が内に如来本願の大用を求め切らんとする。如来歩み行きの重大なる一点である。而してこの永劫修行は淨土が光明世界と示される如く、

く、智慧光明をもつて行われる。定善法は觀法といわれ「觀は照なり」と明されるとき、永劫修行は眞実智慧光をもちて群生海を照破照育する事に於て行なわれるのである。方便という世界もここにかかわつて来るものである。諸仏如来有異方便」といわれて一に智慧光界が展開せられる事は、方便なくては攝取する事能わぬ衆生の眞実相を如来が照求しゆく、無限に機の本源に到らんとする如来永劫修行に外ならない。方便とは如来の修行であり、「方便不思議」とはその意味である。ここに定善法こそ如来永劫修行の場である。その定善法に如来空中住立が明されるが、それこそ、限りなく自心に執固流行せる衆生存在の根源相に如来が遂に立ち給う事であつて、ここに衆生真底への永劫修行は不虛偽なる事が歴然と示現せられるのであり、永劫修行の自証に外ならぬのである。

かく如来智慧光の永劫修行は困願のただ中に衆生真底を照視しゆく。而してそれは大悲誓願の知恵光であるが故に、衆生の真底に沈潜する場をしてそのまま衆生の闇を破する場とする。如来の衆生原点への廻入こそが自然に衆生の黒闇を破するものになるものでなければ、如来永劫修行もその存立理由を失墜するものであり、定善眞実淨土の展開が又同時に方便教である仏法不可思議も意味を失なおう。逆にいえば、「彼土光明從ニ如来智慧報ニ起。觸レ之者無明黑闇終必消除」といわれるところの、「之に触れる」一点をこそ、如来永劫修行は定善法として成就するものであるといえよう。

上述の如く、定善法の上には衆生の存在の根源に沈潜して、そ

こに眞実衆生の救いならんと永劫修行する如来悲願が一点の曇りなく顯現せられているのである。これ、如来の歩み行き、在り様に外ならない。而してそれは、仏道が仏名に於て成ぜられるに深く呼応するものであろう。「名が仏事をなす」仏道、「称我名号下至十声」の叫びを聞く仏道に於ては、報仏報土が衆生の上に名乗りを上げ展開する事とは、「彼仏光明無量照十方国」無所障礙「是故号为阿弥陀」と教言される如く、光明清淨無量世界相が阿弥陀なる名号に於て体现せられる事に外ならぬ。では定善法の上での報仏報土の名乗りとは「南無阿弥陀仏となります」ことであらう。而してそこに智慧光を以て衆生の真底に永劫修行し、衆生の黒闇を破せることは「南無阿弥陀仏といふ本願をたてまし」す事の内景ではないか。それでは定善法の上に既述の如くの、機に即した如来の在り様を窺う事とは正しく「南無阿弥陀仏といふ本願をたてまして」南無阿弥陀仏となります「す」といふ仏名号の、その内景を真に了受する事である。名義に相応する事であり、名号のいわれを聞く事である。ここにこそ「上來雖説定散兩門之益望仏本願意」在衆生一向専称阿弥陀仏名こなる感応が成立するのである。これ、像觀・真身觀に念仏が教示されねばならなかった所以である。そして南無阿弥陀仏の内に展開せられるその如来の在り様こそが善導をして「言阿弥陀仏者即是其行」といわせしむるものであろう。正しく阿弥陀仏として表象せられる如来の在り様に歸命する無有出離之縁の下々品心にとりては、往生への行は、撰取不捨なる如来の在り様そのまゝを行として乗彼願力すること一つの外にはないのである。

「念仏衆生撰取不捨」とはかくの如き如来の事実、在り様を一言にして喝破したものであり、本願の自証もここを離れては決して生命を具さぬと言ひ得よう。念仏の中に衆生が觀知せしめられる本願の歩み、本願の事実こそ、本願の自ずからなる証明なのである。

## 譬喻經類の一研究

特に経律異相・法苑珠林所引譬喻經類と大正大藏經卷四所収譬喻經類との対照を通して

大内文雄

僧祐の出三藏記集卷九に東晉の康法邃の手になる「譬喻經序」という次の一文がある。

譬喻經者、皆是如来隨時方便四說之辭……（中略）……而前後所寫互多複重、今復撰集事取一篇、以為十卷、比次首尾皆令各別、趣便易了於心無疑、……（以下略）<sup>①</sup>

右の序文によれば、この譬喻經は純粹の翻譯經典と言ったものではなく、新たに諸經より譬喻を集めて首尾一貫せしめた性格のものであることが知られる。またこの經典に関して出三藏記集卷二には、「晉の成帝の時、沙門康法邃、衆經より抄集して此の一部を撰す」<sup>②</sup>と記しており、隋の法經錄卷六を見れば、この經典を「雜譬喻集十卷」<sup>③</sup>とも記録している。ここでは現行譬喻經類の中に